

書評

鈴木重行 編著

ID ストレッチング

大道 等 (国際武道大学大学院スポーツ医科学系)

書名にある ID とは何かについての説明は本書に譲るが、聞き慣れたようで新奇なこの接頭語は、チョット手にしてみたいくなる演出効果をあげていよう。ストレッチという言葉も体育授業用語として、ここ 20 年言い古された感が強いものの、本書の伸張性という概念をもとに考え直すと新鮮にリバイバルする。

国武大でトレーナーやスポーツ医科学を専攻する学部生や院生に本書の印象を求めたり、書評を書いてももらったところ（詳しくは「体育の科学」誌 1999 年 9 月号拙論）、1）今までとは何か違う見映え、2）写真が多く解剖図が常に並列されていて勉強しやすい、3）生理学の専門的知識も必要で精読を要する、4）トレーナーには良い本だが選手が傷害を負った患者の立場からは難解なりハ書、等の感想が寄せられた。

本書がかもし出す「新しい何か」について熟考してみると、その新しさは正統性と古典性にあると思う。ものごとの説明が、縦糸の軸と横糸の軸が織りなす格子点の順序に従ってなされる時、学び手はそこに体系の美を見いだし、かつ正統性を感じ取る。古典性とは評者をして明治期の「体操伝来」について、次のように想起させた経緯に基づく。

スウェーデン体操が医学者でもあった森鷗外の小説「青年」で 1910 年の早きに紹介された事実は余り

知られていない。一方、スウェーデン体操は医療体操の面もあったので、それを最初に紹介したのは最近の研究によると東大医学部初代学部長三宅秀であったという。明治 17 (1884) 年という驚くべき早期に、三宅は「治療通論：中巻運動療治」において筋治療の個別性をスウェーデン体操に学んでいる。「所用ノ筋肉ノ収縮ヲ」引き起こさせるには、介助者がその拮抗筋に他動的な力を与える必要があると、本書の ID の思考法が運動療法には重要であることを見抜いていたのである。

新興ニッポンの近代体操の紹介は以降、医学者による機能解剖学的解釈を付すことが金科玉条となる。少なくとも解剖図を見ることで西洋科学の文明性を感じとる立場が体育界を席卷した。三宅の言う「自動・他動運動」の別が、スウェーデン体操と ID ストレッチングには存在するが、鈴木重行氏らによって 115 年ぶりに古典への回帰と追認が書物となって結実したと考えられる。

和魂洋才という言葉がある。本書はそれとは逆に「西洋の心が日本人の手技によって再生された和才洋魂」と呼ぶべき産物である。なお本書の写真および解剖イラストに関わられた方々に賛辞を送りたい。また光沢紙でソフトカバー仕立てにした企画も読者の支持を長く得続けるであろう。

(B5 頁 212 3,800 円 + 税 1999 三輪書店 刊)